

令和元年度 奈良市立西大寺北幼稚園 研究実践概要

園長名 大西 育代
全園児数 51名

1. 研究主題

夢中になって遊び込む子どもの育成をめざして
～心が動く環境と援助～

2. 研究年度 初年度

3. 研究主題設定理由

自ら考え行動する力を身につけるために、遊びや生活を通じた体験による教育、アクティブラーニングすなわち「主体的・対話的で深い学び」の土台を形成することが幼児教育で求められている。幼児が主体的に行動するには、「おもしろい」「もっとやってみたい」と繰り返し取り組む中で試したり、自分なりに考えたり、友達の刺激を受けたりして、夢中になって遊び込む中で育つと考えられる。幼児が心を動かし、自ら「やってみたい」と思える環境構成の工夫や保育者の援助について探っていきたいと考え、主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

○ 主体的に身近な環境にかかわり、幼児が興味や関心を深めながら「もっとやってみたい」と感じ、夢中になって遊び込む保育内容の創造や工夫に努める。

②研究の重点

- 子どもがおもしろさを感じ「やってみたい」と自ら環境に関わり、遊び込める環境づくりを工夫する。
- 子どもの心の動きや発想を受け止め、一人一人の子どもの発達に応じた援助を行う。
- 遊びの中で、学びにつながる力を保育者が見極め、育んでいくための援助の在り方を探る。
- 保護者や地域との連携を深め、保育内容の充実に努める。

③活動の方法

_____環境構成 _____保育者の援助

【事例1 4歳児 『ジュースの色が違う』 6月】

ねらい ○水や石鹼、花などを使って、遊びを楽しみながら、不思議さやおもしろさに気付く。
入園当初から、5歳児の遊んでいることに興味をもったり、いろいろな遊びの環境にも進んで関わって遊んだりしている。5歳児が始めた草花を使ってのジュースづくりや石鹼を使っての泡づくりにも興味をもち「お花のジュースだ」「あわあわクリームみたい」と自分なりに花をすり鉢やカップに入れてまぜたり、水をそそいだりすることを楽しむ姿があった。パンジーや朝顔などいろいろな夏の草花を準備し、保育者も遊びに加わりながら、色の違いや感触なども一緒に楽しむようにした。朝顔の花びらで「ぶどうジュースできた」と嬉しそうに保育者に話す。パンジー

を使ってつくっていた友達のジュースに気づき、「わあ、オレンジジュースみたい。どれでしたの？私もやってみよう」と友達の色に気づき、話したり、試してみようとする姿があった。遊びの後の話し合いの場でも、子どもの発見や気づきを知らせると、やってみようという興味をもち、自分なりに感触や色の違いを楽しみながら遊ぶ姿が見られた。ジュースづくりや泡づくりを別々の場で何度も繰り返し楽しんできたある日、一人だけ違う色になっていた。「色が違うね」と尋ねると、一緒に遊んでいた子が「石鹸を入れてたよ」と見ていたことを話し出し、つくっていた子も「石鹸入れて振ったら、色が変わった」と嬉しそうに話した。



【反省・評価】

石鹸という違う素材を入れたことで色が変化し、どうして？不思議という思いをもち「もう一回やってみよう」とする気持ちにつながった。遊びながら、偶然ではあるが思わぬ発想を保育者が見落とさずに受け止め、まわりに知らせることでより子ども達も夢中になり、意欲的に取り組む中で満足感も感じられたのではないかと考える。

【事例2 4歳児 『みんなが入れる大きなお家をつくりたい！』 10月】

ねらい ○友達と一緒にイメージを共有して遊ぶことを楽しむ。

1学期半ばから、砂場や木製遊具で、ごちそうづくりやままごとごっこを楽しんでいた。2学期になりお母さんや子どもになっての家族ごっこをしていたので、ゴザやブルーシートを準備したりいるものを聞いたりして、一緒に遊びの場をつくっていった。友達のしていることに関心を示し、「ぼくも、入れて」とお家ごっこの遊びが広がってくると、遊びの場が狭くなってきた。話し合いの場でいつもお家ごっこをしているA児が「もっとたんぼ組のみんなが入れる大きなお家がほしい」と思いを話し、話し合う中で「じゃあ、段ボールを使ってみる？」と提案すると、「それがいい！」段ボールを使ってお家づくりが始まった。自分達でガムテープを切って貼り合わせ「もっと大きくしたいな」など話しながらお家の囲いが出来ると、イスやテーブル等必要な物も進んで準備したりする姿が見られた。園庭にたくさん落ちている葉っぱやどんぐりを一緒に拾いに行き、「これで味噌汁をつくらう」「私はケーキに使おう」と料理づくりも楽しんでいた。芋ほりで掘ったさつまいもやバーベキューの網なども準備して置くと、「お肉を焼きましょう」とどんどんイメージを膨らませていた。遊びの振り返りで、経験したことや考えたことについて話す姿を認め、共感する。キャンプでの経験から太い木やトング等本物の素材を準備し、お家ごっこから、キャンプごっこにつながっていった。



【反省・評価】

A児が作りたかったことを、友達と一緒に考えることでイメージが広がり、みんなで共通のイメージを探って遊びを進める姿につながった。友達や保育者のアイディアに刺激を受けて作り始めたり、互いに自分の経験から遊びに必要なものを伝え合ったりすること、友達と一緒に思いを出し合ったり遊ぶことの楽しさを感じられたように思う。子ども達の要求を受けて、提供したり取り出しやすい場所に用意したことで、子ども達のイメージが広がり、夢中になって遊び込む姿につながったと考える。

【事例3 5歳児 『映画館にしよう！』 5月】

ねらい ○友達とイメージを共有し、自分の考えを話しながら一緒に遊ぶことを楽しむ。

園庭で自分たちの好きな曲をかけ、踊ったりうたったりして遊んでいる子どもたち。ある日、

一人の子が「映画館にしよう」と話し、椅子を並べ出した。保育者も子どもの思いに共感し、「面白そうやね、映画館て他には何があるのかな？」とイメージが広がるように声を掛けながら遊びを見守った。はじめは保育室前の廊下につくっていたが、あまりお客さんが来なかったので、保育者が「お客さんがいっぱい来てくれるところってどこかな」と問いかけ、子どもと一緒に考えた。そして、園庭にあるテントを使い、以前お化け屋敷ごっこで使った段ボールやベックス紙のカーテンで囲って場をつくることになった。

友達や4歳児がくると「椅子に座って見て下さい」「始まる前のお約束を言います」と前に立って話したり、「次はUSAのダンスが始まります」「ヒーローショーが始まります」と紹介したりしながら、曲に合わせて体を動かしたりヒーローショーごっこをしたりすることを楽しんでいる。

ヒーローショーごっこでは、「悪者は後ろから出てきた方が怖いと思う」と登場の仕方を考えたり、「怖い音がしたらもっといい」と鍋やタライなどを紙芯で叩いて音を出したりする姿や、「最後は必殺技でやられることにしよう」とお話を考え、友達に話をする姿が見られる。保育者も、「どうやって出てくるの?」「みんなで見てみよう」と周りの子どもと一緒に注目出来るようにしたり、友達同士で話をしながら遊ぶ様子を見守ったりする。



【反省・評価】

映画館ごっこの場を周りの友達からも目につきやすい場所にしたことで、友達や年少児に見てもらえる機会が増え、もっと面白くしたい、といろいろなアイデアを出して試したり工夫したりする姿に繋がった。

【事例4 5歳児 『海遊館よりすごいのがつくりたい!』 10月】

ねらい ○友達同士で話をしながら、自分達で遊びを進めることを楽しむ。

海遊館に遠足後、楽しかった経験を思い出して、折り紙や空き箱などで海の生き物をつくっていた子どもたちが、当日休んでいた友達にも見せてあげたい、と大型の段ボールに絵をかいいたりトンネルをつくったりして「海遊館コース」をつくりはじめた。周りの友達も興味をもって一緒にしたり、また別の場所では「クラゲのドレスでショーをしたい」とクラゲをイメージして衣装をつくり、踊りを考えたりして遊んでいる。保育者は、『海遊館』という共通のイメージをもっているそれぞれの遊びにつながりが生まれて欲しいと考え、園庭でも引き続き遊べるように、また、それぞれの遊びの場が互いに見やすいように考え、準備しておいた。

翌日、早速遊びだした子どもたちは、以前から遊んでいたアスレチックコースと海遊館のトンネルを組み合わせ、「難しい海遊館コースをつくらう」と板や巧技台などを持ってくる。また、クラゲショーをしていた子どもたちも、「コースを全部クリアしたらショーが見られることにしよう」と一緒に話をしながら、自分たちで遊びのルールを考え、周りの友達に伝えたり、看板をつくったりしている。



【反省・評価】

遠足の楽しかった経験を追体験できるように素材や道具を用意して置いたことや、同じ「海遊館」というイメージで違う遊びをしている場を近くに再構成したことで、子どもたちが「海遊館コースをつくる」という共通の目的をもって互いの考えを出し合って、内容や方法を決めたり自分達で遊びを進めようとしたりする姿が見られた。保育者が子ども達から出た考えや思いを受け止め、遊びを進めていく過程を大切に見守り、支えていったことで意欲をもって、継続して取り組むことができた。

【事例5 地域の人との関わりの中で～サッカーを楽しもう～ 通年】

ねらい ○地域の方に親しみをもちながら、友達と一緒に体を動かして遊ぶことを楽しむ。

地域の方に来て頂いて、年4回運動遊びやサッカーを教えている。活動は、コーチの指示を聞いていろいろな体の動かし方を取り入れた運動を行ったり、ボールに親しんで遊ぶことや試合形式のサッカー遊びをしたりするなど、普段体を動かして遊ぶことに苦手意識をもっている子どもも楽しんで取り組めるような内容になっている。4歳児は初めての経験でボールを蹴る時に思わず手を使ったりすることもあるが、体を動かすことを楽しみ、喜んで参加している。5歳児は2年目の取り組みになるので、コーチにも親しみをもって、活動前の準備などを手伝いに行く姿も見られる。

進級当初はあまり戸外での運動遊びには積極的でなかった5歳児A児は、ボールの扱いが思うようにいかず普段の遊びではあまりボール遊びに参加しなかったが、「サッカーを楽しもう」の活動を重ねていく中で次第に友達と一緒にボールを追いかけることを楽しむようになり、2学期の終わりには普段の遊びで友達がしているドッジボールやサッカー遊びにも自分から「入れて」と声を掛け、一緒に体を動かすことを楽しむ姿が見られるようになってきた。



【反省・評価】

地域の方との交流活動では、普段園では経験できないことをするよい機会となる。年間を通じて交流を重ねていくことで、地域の方への親しみの気持ちや活動への興味が深まり、より子どもたちの心を動かす体験につながると感じた。また遊びの中で、サッカーのルールを共通理解し、自分達で遊びを進めようとする姿につながり、A児は遊びや生活を通して積み重ねてきたことが自信となり、運動遊びも楽しむ姿につながったと考える。

5. 研究の成果

- 一人一人の興味や関心を捉え、保育者が子どもの思いに共感しながら意図をもって、必要な環境を準備したり、一緒に用意したりしたことで「やってみたい」「つぎはこうしよう」とする姿につながったように思われる。そのために保育者は、発達段階を捉え、子どもの姿から興味や関心はどこに向いているのか、何を楽しんだり、おもしろいと感じたりしているのかを見取り、思いに寄り添いながら、必要に応じてヒントや認める声かけ、見守るなど、その年齢や場面、ねらいにそった保育者の援助が大切であると感じた。
- 4歳児は5歳児の生活や遊びの様子に刺激を受け、興味関心を広げたり、同じようにやってみようと挑戦したりする姿につながり、5歳児は、遊びの中で経験したことを4歳児に教えてあげようと自信をもち自分達で意欲的に遊びを進める姿があり、お互いが刺激し合い夢中になって遊ぶ姿に異年齢の関わりも大切であると再確認した。また、地域の方との交流で、普段とは違う経験も積み重ねることができ、自ら取り組もうとする姿にもつながったように思う。

6. 今後の課題

- 今後も一人一人の興味関心を探りながら、幼児が心を動かし「もっとやってみたい」と感じ、夢中になって遊び込む幼児の姿を目指し、環境構成や保育者の援助の在り方を探っていきたい。